

オペラはどこで観るか

塚田 繁 (高21回)



ニューヨーク・メトロポリタン歌劇場前にて

かつてはバブルの申し子のような存在でもあった日本におけるオペラ鑑賞も、楽しみ方の多様化が広がり、インフラも整いつつあるので、愛好家の中ではすっかり定着してきたといえますでしょう。新国立劇場がオープンしてから既に数年、レパートリーも増えてきてシーズン中の上演回数も少しずつ増加してきているようです。

この中でいまだバブル的様相を呈しているのは、いわゆる外来オペラです。まずその数の多さにびっくりします。パリ、ウィーンから名も知らぬ東欧の一座までいったい何団体来日しているのでしょうか。次にその値段ですが、いわゆる一流といわれている外来オペラのS席は65,000円、しかも日本ではS席の割合が一番多いようで、平均価格もかなり高くなると思います。そして肝心のその内容ですが、初めて来日するオペラ団だと多少は個性的なものをそろえるでしょうが、2回目、3回目になると、客を集めやすい歌手や指揮者さえそろえてお

けば、というやっつけ仕事ではないだろうかと思ったりします。

やはり日本にいたら、日本に定着しつつある日本の団体のオペラを観、外国のオペラは、どうせ同じようなお金を出すのなら、現地で観るのがはるかに満足を得られるのではないかと思います。それでは、どこで観るか。代表的なオペラハウスのうち、海外勤務の合間に観た私の経験から紹介できればと思います。

1 ロンドン

コベントガーデンにあるロイヤルオペラハウスは、ヨーロッパ有数の音楽マーケットの中心的存在として、マネージメント、演奏の質はかなり高いとされています。値段は相応で人気公演で195ポンド、4万円前後もします。9月から7月までの間に20強のプロダクションが150公演近く行われます。ただし注意が必要なのは、ロイヤルバレエも公演をしているので、短期滞在の場合オペラを見ることが出来ないこともあります。チケットはインターネットでもだいぶ買いやすくなっているようですが、人気プロは早く確保しないと売切れの恐れがあります。ロンドンにはもうひとつの常設オペラハウス、イングリッシュナショナルオペラが、ウェストエンドの劇場街の中にあります。これも2300席あまりの大型の劇場ですが、かなり古めかしい。演目は原則英語でやるので、なれた人には違和感があるかもしれません。シーズン80公演くらいで時々大物歌手も出ます。ただ予算が限られているので、豪華さはいまひとつ。

2 チューリッヒ

小国スイスにあるオペラハウスですが、これまで日本ではあまり知られていなかったものの、2007年9月の日本への引越し公演でその実力が知られるようになりました。このオペラの特徴は次のようなものです。

- 質の高さ：ドイツ語圏ではトップクラス、かつどの演目も水準高い。
- 大物：最近ではめったにオペラの舞台に出ないバルトリ、指揮者のアーノンクールなどヨーロッパの大物がよく出るところ
- 公演数の多さ：9月から7月まであまり休みなし、たまにバレエがある。
- サイズ：1100席ほどの小さい劇場なので、どこからもよく観られる。
- チケットは物価高で高いが、スイスの国民性であるきめ細かい設定、通常は高いもので2万5千円から3万円。中くらいの値段でも良い席です。

チューリッヒは各地からの金持ちが集まるところ、巨大銀行2行が本店を構えるところでもあります。そこのオペラハウスの水準が高くなるのは必然。オペラ歌手も売れて収入が増えるとスイスに住み、ついでにそこのオペラに出演、という事情もあるかもしれません。オーケストラ、コーラスの質も極上、メンバーである知人の話では、ドイツ語圏では最も高給であるらしいとのこと。加えて90年代になってやり手のペレイレ支配人が経済的基盤を整えており、昨年の来日時にレセプションにもぐりこませてもらって楽員の話を書き聞きますと、ビデオ撮りなど忙しくなっているが、収入が増えて大変結構との事でした。

7月頃に、そのシーズンの主なプロダクションをまとめてやる「音楽祭」がありますから、季節もよいので出かけるのに一番よい時期です。

3 ニューヨーク

オペラはもちろんメトロポリタン歌劇場(メト)ですが、まず第1の特徴は、豪華な出演歌手の顔ぶれです。それも著名歌手が次から次へと入れ替わり登場、シーズンを通じて音楽祭をやっているような感もあるほどです。現在各地のオペラハウスでアメリカ出身の歌手が非常に多くなっていますが、やや俗物的なニューヨークの聴衆は、自国の歌手はヨーロッパで有名になってからしか主役級に採らないようです。

次にとても保守的な演出です。ヨーロッパ、特にドイツを中心にオペラ公演における演出家優位の構図がますます幅をきかせており、日本でもその傾向が強いです。この点メトは一部を除き、非常に写實的、伝統的な演出が多く、オペラを普通に楽しむことが出来ると思います。

この背景にはドイツ、イタリアあるいは日本の国立劇場とは異なり、アメリカのオペラ団体には公的な資金援助はまったくなく、すべてパトロンあるいは大衆の寄付によって成り立っているという事情があります。移民の国アメリカでは、ビジネスで成功した人は、文化面では絵画を集めて美術館に寄贈するか、オペラなどの音楽団体に高額寄付をするのが名を残す手っ取り早いやり方です。大口寄付者は当然の権利として何かと口を出しますが、高齢者のパトロ

ンが多い中で過激な分りにくい演出は嫌われるのは必定、モダンな演出家からすると古色蒼然たるプロダクションが中心になります。

ところで、オペラ団体としての組織は非常にしっかりして、特に舞台裏方のプロ精神に富んだ貢献ぶりは、アメリカの各種機関の中で非常に珍しいと言えます。これは2006年まで支配人を務めたヴォルピ氏が舞台装置づくりのアルバイトからのたたき上げで、職人たちをよくコントロールしてきたことにもあると思います。ちなみに後任のピーター・ゲルプ氏は、マネジメント会社、音楽映像ソフト(ソニーの責任者)からの転身で、最近始まった映画館での舞台HD映像の配信(METライブビューイング)などは新しい収入基盤を確保する彼ならではの試みでしょう。

さて、メトの本物の舞台のチケットはそれほどではありません。パトロン達のボックス席以外で一番良い席が275ドル、安いのは15ドルです。メトの一番の特徴はその巨大さです。なにしろ座席数3800です。したがって歌手の顔までよく観ることができる席は限られています。ただ音響自体はすばらしく、低い天井がある席以外はよく聞こ

えます。

公演は9月下旬から5月までほぼ毎日、連日違った演目ですから、短期訪問でもいくつかの演目を楽しめる大変便利な劇場です。メトの隣には、ニューヨーク・シティ・オペラがこれも連日やっています。メトではあまりやらないヘンデルなどマイナーなオペラが観られます。ただ音響が良くなく、声が今ひとつよく聞こえない感じです。

大都市ニューヨークではオペラは他にもあちこちでもやっていますが、ひとつ特別にご紹介したいのが、ダウントウンの100席あまりのオペラ小屋でやっているアマートオペラというもので、人気オペラをシーズンに5演目56公演ほど、値段はシングル35ドルです。これはオペラ好きのアマート夫妻がなんと60シーズンも個人で続けているもので、伴奏は数人、出演は若者中心ですが、みんな真剣で結構楽しめる。一度行くだけでもとても印象が残ります。

オペラは長丁場、欧米への旅行での問題は時差ぼけ、日中あちこち回ると夜はすぐ眠くなりますので、オペラがある場合は午後はホテルでじっくり昼寝、コーヒーをたっぷり飲んで出かけましょう。